

太宰文学における「花」

「花」は、太宰文学の重要なモチーフである。その表現は、作者の心情や社会意識を反映している。以下、太宰の作品群における「花」の描写について考察する。

太宰治の作品を詳しく読んでゆくと、右の様に花を読んだもの、花を描写した作品が多いことに気がつく。比較的浪漫的な作品の多い太宰の作品群において、これら「花」はどの様に使われているのであろうか。表現に一連のパターンがあるのだろうか。ここでは具体的に数字を掲げた統計をたよりに見てゆきたいと思う。但し、次の例の様な場合、花とも樹とも認識できる植物の性質上、統計は大きく植物全体を取り上げた。

例 空の蒼く晴れた日ならば、ねこはどこからかやって来て、庭の山茶花のしたで居眠りしてゐる（葉）

この例は、庭の山茶花のしたで居眠りしてゐる（葉）という表現で、花と葉の両方を指している。また、庭の山茶花のしたで居眠りしてゐる（葉）という表現で、花と葉の両方を指している。

太宰の全作品中、具体的に植物名の出ているものに限り抜き出し

松田智子

松田智子は、太宰文学の重要な作家である。彼女の作品には、花の描写が多く見られる。以下、松田の作品群における「花」の描写について考察する。

例 櫻町、柳町、小梅橋、等。この部落实體が梅の花で埋まった。さう又、次の場合は、まとめて一回に数えた。

・一描写に対し同じ植物を何度も記述している場合。

例 二月には梅が咲き、この部落全體が梅の花で埋まった。さうして三月になっても風のないおだやかな日が多かったので満開の梅は少しも衰へず、三月の末まで美しく咲きつづけた。朝も晝も、夕方も、夜も、梅の花は、溜息の出るほど美しかった。

植物のことを話題にしているもの、同じ植物のことを表現を変えて描写している場合。

例 「アヤ、ちょっと調べてくれ。これは、ウルシの木ぢやないだろうな。」ウルシにかぶれては、私はこのさき旅をつづけるのに、憂鬱でたまらないだらう。ウルシの木ではないと言ふ。

（津軽）

この例は、ウルシの木ではないと言ふ。という表現で、花と葉の両方を指している。

又、野薔薇、錢菊、鬼百合といった各品種もそれぞれ、薔薇・菊・百合の項に入れた。

1 種類と使用順位(表1)

太宰は全作品中、百四十七種の植物を使いわけ、全体の延べ回数として、六百十八回使っている。これは作品数を考慮しても多い方ではないかと思う。個々の植物について見ると櫻、薔薇の使用回数が最も多いが、使用率は共に全体の二割にも満たない。使用回数五回以下の植物が三分の二以上を占め、すべてにバラつきが多く、著しい特徴はない。つまり、ある特定の植物を好んで観念的に使用したのではなく、目に見える植物、見たまま、感じたままを描写したのではないかと思える。これは百四十七種の植物のうち「フォスフォレッセンス」(磷光の意)という実際にはない花の名を記している以外は、すべて誰もが知っているような植物名を記入している

表1

種類	回数
1 櫻	44
2 薔 薇	41
3 松	26
4 菊	19
5 す す き	14
柳	14
6 紅 葉	13
紅 杉	13
7 蓮	12
藤	12
梅	12
8 麥	11
笹	11
コスモス	11
9 苔	10
桃	10
10 す み れ	9

ことから窺える。又、植物名の表記において、例えば、アザミを表記するのに漢字・カタカナ・平仮名と様々に使いわけ、漢字に対して平仮名・会話文・女性の文体などに平仮名で植物名を表記したり、各種の植物名を五個以上列挙するなど、特徴がある。

2 作品別使用頻度(表2)

一作品における植物名の出現数を作品のページ数で割った。上位十一作品の内、「失敗園」「ア、秋」「令嬢アユ」は中期の

表2

作 品	出現率	発表年
1 めくら草紙	2.72	11
2 失 敗 園	2.33	15
3 ア、秋	2.0	14
4 陰火〔紙の鶴〕	1.33	9
5 魚 服 記	0.90	9
6 陰火〔水草〕	0.75	9
7 燈 籠	0.66	12
8 令嬢アユ	0.63	16
9 ロマネスク〔仙術太郎〕	0.62	9
10 思 ひ 出	0.54	11
二十世紀旗手	0.54	11

作品、これら以外は、すべて前期に書かれた作品である。又、「めくら草紙」「陰火」「魚服記」「ロマネスク」「思ひ出」は太宰の最初の創作集『晩年』の中の作品である。つまり比較的前期の作品群に植物名を多く記しており、その作品もほとんどが『晩年』の中の作品であり、これは太宰の作家としての出発の姿勢・作風の変化を見てゆく上にも参考になるのではないかと思う。

3 年代別に見た使用頻度(表3)

山内祥史著『太宰治』の年譜を参照して、太宰の全作品を執筆の年が明らかなものはそれにより、その他は発表の年に従い年代順に配列し、植物描写のある作品を発表作品数で割った。

表3

発表年	発表作品数	描写のある作品数	出現率
昭和7	1	1	1.0
8	2	1	0.5
9	11	11	1.0
10	1	1	1.0
11	8	8	1.0
12	2	1	0.5
13	3	2	0.66
14	17	15	0.88
15	21	18	0.85
16	9	9	1.0
17	11	11	1.0
18	5	4	0.8
19	5	5	1.0
20	3	3	1.0
21	16	7	0.43
22	10	5	0.5
23	11	6	0.54

昭和十二年から十五年の間に下降が見られるが、前期・中期、共に発表作のほとんどに植物名を記していたのに対し、後期だけは著しく減少している。これは前途の作品別に見た使用頻度と合わせて考えてみても窺える。つまり太宰は、四季おりおりの花をそのつど作品に織り込み、又そういった傾向は、比較的前期において著しくみられるといえる。

4 人名に関するもの(表4)

固有な名詞に関するもので、人名だけを抜き出した。又、「思ひ出」「津軽」における実在の「たけ」は、この表から省いた。

菊・松・竹・梅と、1の表でも上位を占める植物が人名にも使われている。又、松・竹・梅は共に三回の内二回までを下男・下女の名として使用している。それに対し、菊は、作中人物に付した名である。

表4

	花	回数
1	菊	8
2	松	3
	竹	3
	梅	3
3	ゆり	2

三

ここでは小説の表現方法として植物をどの様に使っているか、傾向を見たいと思う。(表5)

太宰の全作品中、具体的に植物名の出ている一文をすべて掲げた。但し、次の様な場合はまとめて一回とした。

・各種の植物の列挙

例 津軽では、梅・桃・櫻・林檎・梨・すもも、一度にこの頃、花が咲くのである。(津軽)

・一描写に同じ植物を何度も使っている場合

例 それからずっと向うに松林があつて、その松林の向うに海が見える。(斜陽)

A類 記述に関するもの

例えば「薔薇が咲いている。」という描写は、薔薇の花そのものが問題にされているのであり、薔薇は一義的な意味しかもたない。植物をこの様に使っているものをA類とし、これをさらに六項にわけた。

a項 情景描写

例 窓ちかくの三本の梨の木はいづれもほつほつと花をひらき、そのしたで巡査が二三十人して教練をやらされてゐた。(葉)

b項 会話文

例 「さるすべりは、これは、一年置きに咲くものかしら。」(お

さん)

c項 感情を述べたもの

例 三本の夾竹桃にふらふら心をはかれた。(めくら草紙)

d項 季節を表わす用語として

例 裏庭の霧島躑躅がやうやく若芽を出しかけてゐた頃であつた。(彼は昔の彼ならず)

尚、この項は、「櫻が咲いている。」という描写だけでその季節がわかるという、花の性質上、明らかに季節感を出すために、植物を利用していると認められるものに限つた。

e項 名詞を修飾しているもの

例 山吹が水に散つてゐる絵であつた。(思ひ出)

f項 その他

例 牛島の藤は、樹齡千年、熊野の藤は、數百年と稱へられ、その花穂の如きも、前者で最長九尺、後者で五尺餘と聞いてただその花穂にのみ、心がをどる。(斜陽)

「失敗園」における植物。

からたちは、灌木である。春のをはりに白色の花をひらく。何科に屬するかは知らぬ。(略) すすき。これは禾本科に屬する。(略) 秋の七草とは、はぎ、ききやう、かるかや、なでしこ、それから、をばな。もう二つ足りないけれど、なんであらう。(陰火)

表5

類	項	内 容	回数
A	a	情景描写	464
	b	会 話	72
	c	感 情	26
	d	季 節	13
	e	名詞を修飾	32
	f	その他	4
B	a	比 喩	64
	b	程度を表わすもの	15
	c	感 情	14
	d	その他	1
C	a	一 語	15
	b	一 文	19
	c	その他	1
D		俳句・詩	16

「ドイツ鈴蘭。」「イチハツ。」「クライミングローズフワバ
ー。」「君子蘭。」「ホワイトアマリス。」「西洋錦風。」「流
星蘭。」「長太郎百合。」「ヒヤシンスグラウンドメーメー。」「リ
ュウモンシス。」「鹿の子百合。」「長生蘭。」「ミスアンラア
ス。」「電光種バラ。」「四季咲ぼたん。」「ミセスワン種チュ
ウリップ。」「西洋しゃくやく雪の越。」「黒龍ぼたん。」——私
は、いちいち、枕元の原稿用紙に書きしるす。(めくら草紙)

B類 比喩、及び二義的な意味を含むものとして植物をとらえてい
るもの
例えば、「彼女は薔薇のような人だ。」という描写は、薔薇は花

そのものを問題にしているのではなく、「彼女」を修飾、説明する
手段として用いられている。このように植物名にある意味を含ませ
て、事物、感情を説明する手段としているものをB類とし、さらに
四項にわけた。

a 項 比喩

例 私の計畫も大輪の菊の花のやうに見事に咲き誇る事が出来る
かも知れないのだ。(斜陽)

b 項 程度を表わすもの

例 ナポレオンの欲してゐたものは、全世界ではなかった。タン
ポポ一輪の信頼を欲してゐただけであつた。(Human Lost)

c 項 感情を述べたもの

例 枯野のコスモスに行き逢ふと、私は、それと同じ痛苦を感じ
ます。(ア、秋)

d 項 その他

例 「花のアントは？」(略)

「星と萼だって、シノニムぢやないか。」(略)

「牡丹に、……蟻か？」

「なあんだ、それは畫題だ。ごまかしちゃいけない。」(人
間失格)

C類 挿入句的なもの

前後の意味を成さずに挿入されているものを掲げた。

a 項 一語のもの

例 私の腕くらゐの太さの枝にゆらり、一瞬、藤の花、やっぱりだめだと望を捨てた。（狂言の神）

⑥ b 項一文のもの

例 ふと首かしげて、とっさに了解。薔薇は蘇生した。(二十世紀旗手)

c 項 その他

例 太宰 なんだ。「許す」とは、なんだ。馬鹿／ふん、と鼻で笑って両手にまるめて窓から投げたら、桐の枝に引かかったつけ。（虚構の春）

D類
俳句、詩

例 待ち待ちて ことし咲きけり 桃の花白と聞きつつ 花は紅なり

A類では情景描写として植物を多く使っており、A類中の76パーセントを占める。又、名詞を修飾しているものは、ほとんどが、絵や着物の柄、装飾品に関するものである。B類では比喩として多く使っており、B類中の68パーセントを占める。人物の容姿や印象あるいは、事物の状態や様子、印象を説明する手段として植物を利用しており、その割合はほぼ同数である。又、程度をあらわすものとして、「スミレの花くらい誇り」だとか「タンポポの花一輪の贈りものでも」といった、僅かなもの、ささいなものの程度を表わす言語として利用しているものが多い。C類では、挿入句として、と

りあげたが、前後の文章の継ぎ目なく、ただ書いてあるだけ、抽象的に言葉を書き記しているのもので、こういう挿入句的なものは、前期、特に「虚構の春」や「Human Lost」の中に多く見られ、後期作品の中では一度も使われていない。D類は、作品中に俳句を読み入れたものや、「雀こ」「新ハムレット」の中の寸劇の詩などで、俳句の中には他人のものを引用した作品も入っている。

以上、太宰は小説の表現法として、様々な方法で植物を描写していたことがわかる。しかし、A類の記述に関するものが全体の約8割を占めており、ほとんどは植物を一義的な意味しかもたないものとして取り扱っている。つまり太宰は植物を特別に特殊な扱い方をして描写したのではなく、ごく一般的な情景として描写していたといえる。

四

今までは作品を中心に植物を見てきた。ここでは、随筆・書簡について記す。

随筆ではほとんど植物名はでてこない。ただ昭和15年「かすかな

「藝術とは何ですか。」

「すみれの花です。」

「つまらないものです。」
「藝術家とは何ですか。」
「豚の鼻です。」
「それは、ひどい。」
「鼻は、すみれの匂ひを知つてゐます。」
という記述が見られる。

書簡でも、それほど多くはないが、「夾竹桃咲いてゐるうちに、いちどおいで下さい。」「庭にはいまスズランが咲いてゐて、園子がつとて来て、私の枕元に置いて行きました、同封します。」といった花の話題や、作品で使っている俳句を挿入している。年度別では昭和11年度の書簡の中で一番多く花を記述しており『ワレヲ罪セヨ。』「水蓮の花。」という挿入句的なものが多い。書簡において、この様に花を記入しているということはそれだけ、花に関心が深かったのではないかと思う。

五

太宰は花に関心が深かった。だからその作品においても特定ではない様々の植物名を記述している。又具体的な植物名は出てこないが「死と隣合せに生活してゐる人には、生死の問題よりも、一輪の花の微笑が身に沁みる。」や「人間も、本當によいところがある、と思った。花の美しさを見つけたのは、人間だし、花を愛するものも人間だもの。」という花に関する記述や「われは花にして、花作り。」

「私も亦花作りに苦勞してゐる。「この花を見よ。」「この花を見よ。」と呟きつゝ。」や「かすかな聲」の記述にあるように芸術を花、その芸術家を花作りと置き換えて言っている箇所がいくつか見られる。又、花の名を記述するということについて、太宰の小説論ともいわれている「風の便り」の中で次の様に記述している。

△藝術的△といふ、あやふやな裝飾の觀念を捨てたらよい。

(略) 雰圍氣の醸成を企圖する事は、やはり自潰であります。△チェニフ的に▽などと少しでも意識したならば、かならず無慙に失敗します。無闇に字面を飾り、ことさらに漢字を避けたたり、不要の風景の描寫をしたり、みだりに花の名を記したりする事は嚴に慎しむ、ただ實直に、印象の正確を期する事一つに努力してみて下さい。

太宰の本質的な資質が論理的であるよりも感覺的であり、誇張や粉飾が多く、自己主張を直接になさず、そういった創作において果そうとした最初の作家としての姿勢や、文学的な試行錯誤における様々の文体の方法や、元来の言語感覺の鋭さなどと合わせて考えてみて、比較的關係の深かった「花」を手段とし、所謂、創作における雰囲気や醸成を企図することが試みられたのではないかと思う。

人は誤差發着、**「道心」**「灌ハムベシ」。作品の中の一頁を剪ればバツバ。D讀料、作品中の吾田と荒木蘭錦舞臺劇翻の春マサ「Human Love」の中を多く見られ、幾限の初演披露會を以てず、國水の死、いふもの形式内面がその前、の型式に應酬給の文章の類も目下、式書べてあるが、根柢